

相手の為に真実を隠すか、それとも打ち明けるか

生命科学科 1 年 N. K.

ラ・ボエームはミミとロドルフォ、ムゼッタとマルチェルロの二組の恋愛模様を中心としたオペラである。二組とも劇中で出会いと別れを経験しているが、最終幕ではミミとロドルフォは、ほんのわずかな最期の会話の後に死別、ムゼッタとマルチェルロはよりを戻すという形で幕を閉じた。二組は異なる結末を迎えたが、何がこの差異を生んだのだろうか。

この問いの答えの鍵は第 3 幕にあるだろう。慎ましくも幸せな生活を送っていたはずのミミとロドルフォの仲が険悪になり、別れようとまで言い出す場面だ。ミミはこの間に急激にやせ細り、病気も取り返しのつかないところまで進行してしまっている。なぜこのような状態になるまで気づかなかったのだろうか。いや、ロドルフォは知っていた。マルチェルロとの対話で、ミミは重い病気にかかっており、それは自分のせいであると言っている。また、ミミもその対話を聞いて、初めて自分の死が近づいていることを知ったかのようであるが、自分の体調が日に日に悪くなっているのに気が付かないわけではないだろう。○彼らは一緒に過ごすことのできる時、今ある幸せを壊さないために、不安の種を無視していたのだ。

第 3 幕でロドルフォが、二人で生活していた時にミミに辛く当たっていたことが明らかになるが、それは病気のことで自分が不安になっているのを悟られないように、あえてミミを自分から遠ざけていたのではないだろうか。○ミミがマルチェルロとの会話を盗み聞きしなければ、ロドルフォは最後までミミに病気のことを伝える事はなかっただろう。○また、ミミも死ぬ間際で、ロドルフォに鍵を隠していたのを知っていたことを打ち明けた。打ち明ける最後のチャンスになったからこそ、話すことを決意したのだろう。

一方、悪くない結末を迎えたムゼッタとマルチェルロであるが、この二人はミミとロドルフォとは逆に言いたいことを言い合っている。劇中で別れた原因もムゼッタが男に色目を使った時に、マルチェルロが嫉妬して、苛立ちを隠さずお互いに口論になったことであった。マルチェルロが第 3 幕でミミに言ったように、深く考えすぎずに気楽に付き合い、思ったことを臆さず口に出すことが、二人の仲が最終的には上手くいった要因なのかもしれない。

ミミとロドルフォは言いたいことを隠すことで仲を保ち、ムゼッタとマルチェルロは意見を隠さないことで上手く付き合っていた。相手を思って本当のことを言わない方がいいのか、言った方がいいのかはその時々によりけりだが、ミミとロドルフォの場合は、隠さず話せばよかった。そうすれば、二人でどうやって病気に向き合っていくかを相談するこ

とも出来たし、春になって別れることもなかったのではないか。少しでも二人で共に過ごす時間が増え、最期の時に一言でも多く言葉を交わすことが出来ただろう。○このオペラでは運が味方をし、ムゼッタがミミを見つけることが出来たのでまだよかったが、もし見つける事が出来なかったとしたら、ミミは最期にロドルフォに会う事さえできず、出会ったきっかけである鍵のことも伝えられずに、独り、街角で寂しく息絶えていただろう。